



2013年(平成25年)
4月号(No. 815)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

放射線と登山道

— 放射能汚染の測定に取り組む —

(日本勤労者山岳連盟副理事長・登山道の放射線測定
マップ作成プロジェクトチーム責任者) **浦添嘉徳**

日本勤労者山岳連盟は、2011年3月11日の東日本大震災により発生した、福島第一原発事故以来、登山道など山岳地域における放射能汚染問題に取り組んでいる。これまでの活動のいきさつや、放射線測定の実際について報告いただいた。

日本勤労者山岳連盟(全国労山)は、昨年の夏『放射線と登山道』を刊行した。これは、福島の山および関東の山と登山道、のべ103カ所以上の放射線量を測定したデータを専門家に分析・監修していただいたものである。

私は、労山の「登山道の放射線測定マップ作成プロジェクトチーム」の責任者として、①登山道の放射能汚染測定を実施するまでの経

過について、②『放射線と登山道』を出版するまで、③今後の取り組みについて、報告する。

測定運動を始めるまで

2011年3月11日の福島第一原発事故では、大量かつ広範囲に放射性物質が放出され、5日間でおよそ17万人の住民が避難した。福島県南相馬の農家は「田畑を除染しても、毒に汚染された山を背

目次

放射線と登山道 —放射能汚染の測定に取り組む—	1
総本「アルパタ山のビックルものがたり」出版にあたって	4
『最後の辺境 チベットのアルプス』	6
第2回梅棹忠夫・山と探検文学賞受賞に寄せて	
山でマダニの被害を防ぐために	7
東西南北	8
「嫉捨山」についての一考察	
『句集 高嶺星』発刊に寄せて	
活動報告	9
集会委員会／総務委員会	
支部だより	11
東九州支部	
図書紹介	12
図書受入報告	14
会務報告	15
ルーム日誌	16
会員異動	16
INFORMATION	17
日本山岳会所蔵資料紹介 No.1	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10～20時
水・金……………13～20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10～18時

負っているから、里山から毒が流れ出して、田畑を汚染してしまう」と、放射能の恐ろしさについて語っている。

放射性物質は、山岳・里山に降り注ぎ、樹木、葉、堆積した土壌および水たまりに沈着・沈殿している。福島・栃木などの河川で捕れたアユなども汚染され、東北や関東近県の山から採取されたタケノコ、キノコ、山菜からは、高濃度の放射性セシウムが検出、出荷停止になっていた。これらを食べたイノシシ、ニホンジカの肉からも高濃度の物質が検出され、日本の豊かな里山の恵みが汚染され、生態系にも変化を及ぼしている。

いまなお15万4千人の方々が避難生活を余儀なくされている。原発事故の年は、福島県の観光地への

予約はほとんどがキャンセルされ、他県からの登山客も極端に少なくなった。

労山は、毎年6月第1日曜日(東北・北海道は7月)に、全国いっせいにクリーンハイク・清掃登山を実施しているが、これに参加した福島の労山の仲間から、「福島の山の登山道は歩いても大丈夫だろうか」という素朴な疑問が出されたことが報告された。

福島県の労山加盟の福島登高会は、原発事故後の7月に独自に放射線測定器を購入、山と登山道の放射線測定を実施、その結果を会のホームページに公表していた。また東京労山加盟の会員も個人で測定器を購入、6月に丹沢や高尾山系の山の放射線測定を実施、そのデータも寄せられた。

私がこの年の7月、環境省の東北事務所に、自然公園などの放射線測定を実施しているか問い合わせてところ、予算がなく測定器そのものがないことがわかった。

全国登山としては、8月の理事会で、登山者の安心・安全のために、山と登山道の放射能汚染にどう対応するか議論し、具体的な取り組みについてはさらに調査・検討することになった。

最初に考えなければならなかったのは、私たちは放射能汚染の問題については素人であり、まず放射能汚染の専門家を探すことだった。そこで当時、放射線防護についてのアドバイスを国民の立場からテレビなどで行なっておられた野口邦和(日本大学准教授)先生に白羽の矢を立てることにした。電話番号を調べて連絡し、事情を話すと快く相談にのってくれることになった。

9月2日、野口准教授の研究室を訪問。①測定する機種、②測定方法、③測定した結果の分析、④登山団体が山や登山道の放射能汚染を測定する意義があるか——など具体的に相談した。野口准教授は「非常に大切な測定であり、その

価値は十分にあります」ということだった。そして測定器の選定、同機種の測定器で測定することがデータを分析する場合に必要なことなどアドバイスを受けた。

これを受け9月の理事会で、「登山者などの安全を確保し安心して登山を楽しむため、登山道の放射能汚染を測定する必要がある」とことを決定。全国登山に「登山道の放射能汚染測定マップ作成のプロジェクトチーム」を発足させた。

放射線測定器は、HORI B A製の環境放射線モニタ「PAI 000 Radi」(1台約12万円)を10台購入した。

放射線測定を進めるために

福島をはじめ東北や関東近県の山の放射線測定を進めるために、①登山者などの安全を確保し安心して登山を楽しむためには、登山道の放射能汚染マップを作成すること、②山と登山道の放射線測定は登山者および登山団体しかできないこと——などを内容とした「登山道の放射能汚染測定の実施について」という文書を、東北、関東近県の登山加盟組織に送付、役員会にも参加するなどして説明、

協力を求めた。

測定場所は、登山者が行動する登山道の測定を中心に、休憩場所や山頂など。測定する高さは、1メートルの長さの空間線量率(マイクロシーベルト/時)を測定することを基本にした。そして、「登山道の放射能汚染測定のためのマニュアル」を作成。①放射線測定器(環境放射線モニタ・Radi PAI 000)の取り扱い上の注意点、②測定値と場所などは測定記録票に記録すること、③測定データをメールで送信してもらうこと、とした。

測定器10台は、福島県登山に4台、あとの6台は関東近県の県連盟に貸し出して、2011年10月から、山と登山道の測定を開始した。

『放射線と登山道』の出版へ

各県の登山の仲間、登山者などの安心・安全のために、登山道



今回の調査についてまとめたハンドブック

の放射能汚染マップを作成するという、放射能汚染測定の意義を正面から受け止め、測定に積極的に取り組んでいただいた。

その結果、測定を開始して7ヵ月後の2012年4月までに、福島県をはじめ東北、関東など130カ所以上の測定記録が集められた。

この分析を野口准教授に依頼し、昨年5月17日に「放射能汚染と登山道の実態は」と題し、新宿区の会場で講演していただき、関東近県から80名に及ぶ方々が参加した。

参加者からは、「この調査は、登山者に限らず日本のすべての人々にとつて貴重かつ重要なもの。山と里山そして食物との深い関連があるなか、これらの調査が示す意味はとても大きい。取り組まれた登山の姿勢に脱帽です。(東京都新宿区・T)」「登山道の現場の測定値は整合性があり、その正確性、信頼性のあるすばらしい記録だ。(埼玉県ふじみ野市・N)」「細かいデータ分析が登山の際に有用。藪漕ぎや地図読み山行をやるときにも参考になる。継続した取り組みを期待する。(東京都品川区・T)」「放射能汚染について認識を新た



2012年12月、景信山にて放射線測定を行なっている筆者

にした講演だった。この努力をこれからも続け、成果を期待したい。(神奈川県秦野市・M)「非常にわかりやすく勉強になった。登山に關しては登山道を歩いている分には問題がないということで不安がなくなった。引き続き2〜3年測定し続ける必要があると思う。」「初めて登山道の放射線について話を聞くことができた。登山の安全のための情報発信に感謝している。(埼玉県所沢市・K)」など、29名の方から感想も寄せられた。

その後、労山の理事会で、講演の内容をブックレットにして刊行することにし、8月(2012年)に『放射線と登山道』(野口邦和・

監修、日本勤労者山岳連盟・編集、発行・桐書房)として出版した。

6月には、日本登山医学会の学術集会が京都大学医学部構内で開かれる。この集会で、野口准教授が「東北・関東地方を中心とした登山道の放射線測定」という演題で発表する予定である。

登山者の義務として測定を継続

労山は、環境大臣に山岳環境の問題で毎年要望書を提出、環境省と交渉・意見交換を行なっている。2011年12月は、原発事故を踏まえて、①里地里山の環境の適切な保全を図るために、里山の放射線量の測定の実施、②山岳地域や里山の水場の水質調査(放射線測定)の実施、③自然公園の放射線量の測定を求めた。

環境省は、昨年6月に「日光国立公園および磐梯朝日国立公園内公園事業施設等における放射線量測定結果について」を公表した。しかし、これは国立公園内24カ所の「施設およびその周辺の放射線量測定」で、山の登山道を測定したものではなかった。

林野庁は、福島県の森林391カ所の空間線量率(地上1メートル)を測

定し、昨年3月に発表した。登山道の測定は行なっておらず、測定は福島県の森林だけで、他県の森林の測定を行なう計画はない。労山は、7年前に「労山自然保護憲章」を制定、その第1章は、「登山活動を通して、自然を見る目をやしない、自然の変化をとらえ、山と地球規模の環境保全に寄与」することを謳っている。福島第一原発事故で放出された放射性物質が山岳地帯にどのような影響を及ぼしているのか、そのデータを残していくことが求められている。登山者の責務として、労山は測定を継続・実施していく方針である。

2012年12月末現在の測定箇所数1187カ所

県別測定箇所数(山および登山道)
福島県 91カ所／栃木県 21カ所
／岩手県 11カ所／群馬県 16カ所
／茨城県 5カ所／東京都 9カ所
／静岡県 4カ所／埼玉県 6カ所
／神奈川県 3カ所／山梨県 2カ所
／宮城県 5カ所
青森県 5カ所／尾瀬ヶ原 9カ所(登山道のみ)

※測定値は全国労山のHPを参照。

『放射線と登山道』購入方法

日本勤労者山岳連盟と、福島県勤労者山岳連盟のメンバーが中心となり、登山道の放射線についての調査した結果をまとめたもの。福島県のほか東北、関東の130ヶ所の登山道にて放射線量を測定。山とも関わり合いが深く、第一線で放射線研究をされている野口准教授が、登山道の安全性を解析したうえで、放射線が人体に及ぼす影響などを解説している。

監修・野口邦和、編集・(社)日本勤労者山岳連盟

定価630円、A5判 80ページ

申込先・日本勤労者山岳連盟

TEL 03-3260-633

FAX 03-3235-4324

✉ jwaf@jwaf.jp

住所、氏名、購入部数を明記のうえ、お申込みください。

なお、昨行なわれた同テーマの講演会の模様は、以下のサイトにも掲載。

<http://www.jwaf.jp/yama/cgi-bin/jwaf0303.cgi>

絵本『アルバータ山のピッケルものがたり』出版にあたって



この2月に絵本『アルバータ山のピッケルものがたり』を、自費出版することができた。

この絵本は、1925年7月、日本最初の海外登山遠征隊がカナディアン・ロッキーのアルバータ山(3619m)に初登頂をした際、頂上に立ててきたピッケルが辿った運命を巡る、日本、スイス、カナダ、アメリカの登山家たちの友情と情熱のものがたりを、絵と文で綴った絵本である。

2000年、カナダ・アルバータ州ジャスパーで、日本・カナダ両山岳会主催による「アルバータ山初登頂75周年記念祝典」が開催され、次のような言葉がカナダ側から贈られた。

「1925年、あなたたちの祖先はカナダのこの未開の地にやって

芳賀淳子

来て、未踏の難峰に挑んだ。馬40頭に荷をくくりつけ、森を抜け、テントを張り、渡渉を繰り返して、7日間のキャラバンの末、アルバータ山直下の氷河に辿り着いた」。

カナダ人は、大正時代の日本人への賞賛を惜しまなかった。精鋭6人の日本人が、スイス人ガイドと協力して岩壁の山に取り付き初登頂に成功したことは、カナディアン・ロッキー山岳史上、記念すべきことだと評価し遺産として語り継ぐという、おおらかな、かつ真



背景に見えるのがアルバータ

摯なカナダ人の心に私は感動した。この登山隊には、ピッケルにまつわるものがたりがある。アルバータ山を横有恒氏に薦め、支援を惜しまなかった細川護立侯爵から、「私の代わりに山頂に立ててきてほしい」と一本のピッケルが託された。その頭部には侯のイニシアル・MTHが純金で象嵌されていた。16時間の厳しい登攀のあと、そのピッケルは山頂でしつかりとケルンに立てられた。時がたつと、ロッキーのふもとの人々の間に、「山頂には日本人が残した純銀のピッケル」が立っている」といううわさが、伝説ともなつて広がっていった。

23年後の1948年、第2登のアメリカ隊が山頂のピッケルを発見、引き抜くときにピッケルの下部が凍った岩に残された。上部を持ち帰り、ニューヨークのアメリカ山岳会の博物館に保存、展示した。日本では、折れていることは知られていなかった。

1965年、日本の長野高校山岳部OB隊が第5登を果たした。このとき雪がない頂上でピッケルの下部を拾い、日本隊のものとは知らずに持ち帰った。



アルバータ山頂。左端が三田幸夫氏、前列右から二人目が横有恒氏

1996年、学習院山岳部OB隊がアルバータ山に登った。隊の芳賀孝郎(私の夫)は、1966年にニューヨークの山岳博物館で折れたピッケルを見て以来、山頂に残されているはずのその下部をいつか必ず見つけ、一本にしてやりたい思いがいついかなうときがきたと思った。が、頂上で登攀隊は雪が深くて下部を見つけれなかった。

芳賀は帰国し、「ピッケルを一本にしたい」という思いを、山岳会会報「山」に投稿したところ、長野から連絡があった。「私たちが山頂で拾ったピッケルは日本隊のものではないか?」と。



ジャスパークログジから出発するとき。左から二人目が横氏、右から三人目が三田氏

事態は急転直下、1997年の日本山岳会晩餐会で、カナダからの上部と長野からの下部は一本につながった。そして、2000年の「初登頂75周年記念祝典」と同時に、「ピッケルの合体式」が行なわれた。「初登頂記念祝典」で大正時代の日本人の足跡に敬意を払い、語り継ぎ、伝説の銀のピッケルを愛しているカナダ人に接したとき、日本人の私はどうしたらよいか、考えた。登山隊の隊員を父(三田幸夫)に持ち、夫も私もアルバータ山とピッケルに関われたことを思った。語り継ぐことで私ができるのは、絵本にすることだと気づいた。家族、孫のほかにも、できれば山

を愛する方たちに読んで、知っていただければと思った。

それから12年後の2012年6月に、絵本作成に取りかかった。膨大な遠征記を、簡潔で平易な文にし、架空の人物も仕立てた。筋書きには創造部分もある。

父が遺したセピア色の写真、私が訪れたロッキーでのスケッチ、アルバータ山の小屋傍らのテントで仰いだ星空など、画面作りの大きな助けになった。完成は同年12月、出版は2013年2月であった。

◆絵本の申し込み先 Eメール.. alberta1925@gmail.com または 090-4718-9252 (芳賀) まで。

◆価格.. 1700円(送料込)



アルバータ登山とMTHのピッケルに関する年表

芳賀孝郎

- 1924年 12月暮れ、赤倉での秩父宮とのスキー帰路、細川侯がパーマー、ソリントン著のアルバータ山を横に見せて登山を薦めた。
- 1925年 7月21日19:30、横、橋本、早川、三田、岡部、波多野の6名とスイス人のフーラー、コーラー、ウエバーがアルバータ初登頂。細川侯から託されたスイス製MTHイニシャル入りピッケルを山頂に立てた。
- 1948年 7月30日、アメリカ隊アイレスとオーバーリンが第2登に成功。山頂のピッケルと横の登山メモを持ち帰った。アメリカ山岳博物館に展示。
- 1957年 11月、横は英国山岳会100周年記念祝賀会でカナダ山岳会会長ソリントンとアメリカ山岳会会長オーバーリンに会い、アルバータ登頂祝いを受けた。
- 1958年 7月、カナダ隊が第3登に成功。8月、イギリス隊が第4登に成功。
- 1965年 7月29日、長野高校山岳部OB隊、田島、渡辺、下平が第5登に成功。山頂の登頂記録が入った缶とピッケルの石突き部分を持ち帰った。
- 1966年 3月、松方峰雄の案内で、芳賀がNYにあるアメリカ山岳博物館を訪問。MTHのピッケルが折れていることを知った。帰途、ボートランドで第2登のアイレスと会い、石突き部分が山頂に残っていることを聞いた。
- 1967年 3月、石突き部分を持ち帰った長野隊の下平が、大天井岳で滑落死した。
- 1975年 国際婦人年 芳賀淳子はカナダ・アメリカ研修旅行中、パンフ図書館を訪問。そこでアルバータ登頂50周年の記念展示会に遭遇。東京ではJAC横・早川・三田と長野高校OB隊らで、登頂50周年記念祝賀会が開催された。
- 1996年 8月、学習院アルバータ登山隊の棚橋とカナダ人ガイド2名登頂に成功。山頂の石突き部分を発見できず。この3月に、芳賀はアルバータのピッケルがニューヨークからジャスパークに帰ったことを聞き、ジャスパークイエローヘッド博物館を訪問、30年ぶりにピッケルに再会した。
- 1997年 三田幸夫のアルバムから長野隊の写真が出てきた。その中に古い石突き部分を持った人物の写真があった。JAC会報3月号で、芳賀は折れたピッケルを一本の姿にしたい旨を記載した。5月、JACルームにて石突き部分の会合。12月カナダ山岳会会長がピッケルを持参し、JAC晩餐会で合体式を挙げる。
- 1999年 7月、長野高校創立100周年記念行事として、カナダからの本体と長野高校の石突き部分との合体のセレモニーを行ない、芳賀は記念講演をした。
- 2000年 8月、カナダ山岳会と日本山岳会の共催でアルバータ登頂75周年を開催。日本山岳会会員80名が参加し、盛大な記念式典、ピッケルの合体式が行なわれ、伝説のピッケルは、ジャスパークイエローヘッド博物館に永久に展示されることになった。登頂75周年記念誌「この山に呼ばれて」発刊。日本・カナダの精鋭登山隊はこの年、残念ながらアルバータ登頂はできず。

ニュース

『最後の辺境 チベットのアルプス』
第2回梅棹忠夫・山と探検文学賞受賞に寄せて

永田秀樹

中村保著『最後の辺境 チベットのアルプス』が、このたび「第2回梅棹忠夫・山と探検文学賞」を受賞した。

世界各地で学術調査を実施し、生態学者、民族学者として知られ、比較文明論を唱えた梅棹忠夫さん。中国南西部に20年以上にわたってフィールドワークを重ねてきた中村さんにふさわしい賞で、担当編集者として、とても嬉しかった。

最終選考の5作品に入っていると聞いたところ、著者の中村さんからメールが届いた。ミラノ大学のF・マルタさんが『最後の辺境 チベットのアルプス』を卒論に取り上げ、自宅を訪問したとの内容で、二人の笑顔の写真も添付されていた。

長年、日本山岳会の「Japanese Alpine News」を編集し、英国の王立地理学協会から横断山脈研究の功績でバスケット・メダルを受けた中村さんの世界的なネットワーク、発信力の証であり、受賞を確信したメールとなった。

中村さんから出版の話があったのは2010年秋、編集にとりかかったのは、翌年3月だった。すでに『ヒマラヤの東』、『深い浸食の国』、『チベットのアルプス』の3部作を山と溪谷社から出版し、秩父宮記念山岳賞に輝いている。この3冊で、チベットのラサから四川省の成都までの広大な地域の概略は把握できるため、次の新たな本には何を加えるべきだろうかと考えた。

未踏の辺境や山岳を紹介するために重要視されるのは、記述の正確さと写真、詳細な地図である。

写真を中心にした大型本は、2008年にドイツ・ハンブルクのDejean-Verlag社から『Die Alpen Tibets』(テキスト、地図30葉、写真260枚)が刊行されている。発行者の精神科医のD・ペドロさんは、この本のために出版社を起こし、現在は最新の写真を加えて、山域別に全4巻の英語版を編集中で今年末ごろには出版されるという。

すでに大型本と3部作があるの
で、英語版のダイジェスト版として、山域別に全体を解説する内容を考えてみた。しかし最初の打ち合わせで、中村さんは完璧な案を練り上げていた。9割以上の完全原稿と使用すべき山岳写真が準備され、懸案の地図は、この地域の踏査経験を持つ竹内康之さんの精密かつ詳細な図が、山域ごと、踏査ルートごとに添えられていた。

精読すると、山溪3部作以降、2005年からの踏査記録が網羅されていた。重複する地域でも、より深く未踏の山々を求めて分け入り、その素顔に迫っている。3部作を読んで横断山脈を理解したつもりだったのが恥ずかしくなる。

禁断の易貢蔵布探査など、「最後の辺境」の広大な踏査が3冊に収まるわけがなく、はるかに広くて奥深い。さらに四川、雲南、東チベットなどの探検家の足跡や宣教師たちの苦闘を追って綿密なフィールドワークを重ね、時に宣教師の文献を探ってパリにも飛ぶ。中村さんの執念には圧倒された。編集者として、写真と地図にできる限りページを割くことにしたが、「梅棹賞」の受賞理由は「フ

ールドワークの重要性、地図の正確さ、中村さんの探究心」とあり、我が意を得た思いだった。

中村さんは『最後の辺境』について、海外だけで14カ国、29回の講演を行ない、貴重な山岳情報など惜しげもなく提供する。外国での反響や交流、講演旅行などにも章を割いているが、情報を隠さず共有することによって、友情は普遍的になることも示している。

「登山家は読むこと、登ること、書くことの3つそろって一人前」が中村さんの座右の銘だが、担当して思うのは、現代の登山家・探検家はこれに「伝えること」を加えるべきではないか。インターネットの時代は、書くだけでは足りず、積極的に発信することによって多くの情報が集まり、より大きな成果を生み出していく。

中村さんは現在、地図と写真を組み合わせた『チベットのアルプスと辺境の地図集』(英・日・中国語)に取り組んでいる。地図作製は竹内康之さん。足りない写真は世界中から集めているという。この書もまた、多くの登山家を導く貴重な書物・資料となるう。

メディカル

山でマダニの被害を防ぐために

医療委員 秦和寿

マダニと感染症

山歩きでマダニに寄生された経験をお持ちの方は少なくないだろう。山地のやぶにはマダニが常在しているから、沢歩きの後の尾根筋に出るまでとか、野鳥観察で草むらに在る間などは付着される可能性もある。マダニが皮膚に付いても、痛くも痒くもないので気づかないことが多い。

マダニによる被害は従来から知られているが、今回明らかとなった感染症はより深刻である。疾病は重症熱性血小板減少症候群（SFTS）で、発症が8例報告された。国内では初めてのことである。患者は山口・愛媛・鹿児島・広島・佐賀・高知・長崎（2例）と、西日本に集中している。

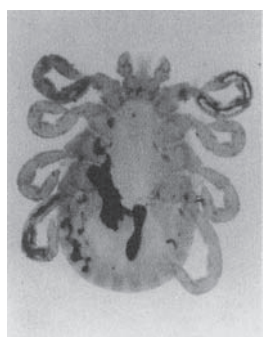
マダニのなかで媒介能を有するのは、フタトゲチマダニやオウシマダニの2種といわれる。現在のところ、国内でのマダニとウイルスの関係がどうなっているのかなどの基礎データは全くなく、これからの研究結果を待つしかない。

生態と寄生

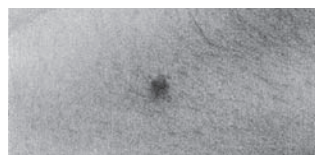
では、マダニに寄生される恐れのある登山者はどうすればよいのか、具体的な防除法を記す。

マダニの活動時期は春から秋である。ササの葉の裏などにいて、哺乳動物が通るのをじっと待ち、二酸化炭素（炭素ガス）と振動などに反応する。外気の炭酸ガスの濃度は約400ppmだが、人の呼吸には4万ppmの炭酸ガスが含まれるから、マダニは直ちに感知する。

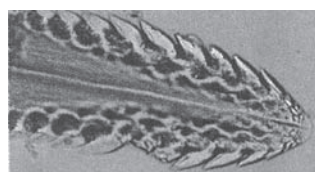
このとき、ズボンがウールなどであればマダニの虫体が引っかけやすい。そうはいっても、すぐ皮膚に食らい付くわけでない。しばらくの間、安心できる部位を探し皮膚をさまよう。この段階で除



図① マダニ:体長2～5ミリ



図② 人に寄生したマダニ:体長2～5ミリ



図③ マダニの口器

去するのが良いのだが、人間側は知る由もない。やぶこぎをした後など、着衣をざっと見渡し点検することが、寄生を防ぐことにつながる。

防御策と注意

マダニを付着させないためには、なるべくやぶの中に入り込まず、着衣や忌避剤（虫除けスプレーなど）で予防する。次に身体的点検、マダニが寄生したときの除去法、受診時の注意などを列挙する。

服装・肌を露出させないように長ズボン・長袖・帽子を着用する。上着の素材はウール製品を避け、樹脂加工布の製品（ナイロン、ポリエステルなど）を着用する。

スパッツ・マダニが這い上がったてることがあるので、靴下の中にズボンの裾を入れて、その上からスパッツを着用。このとき、ウールの靴下は避ける。

忌避剤・草むらを歩くとき忌避剤を利用する。短時間の効果なので、1時間おきに処理することが望ましい。

身体的点検・やぶや草むらを歩いたら、風呂に入り身体を細かくチェックする。皮膚の柔らかいところ（わきの下や二の腕、胸、脇腹、内腿）や、寄生例が多い「まぶたや「陰部」などを重点的に点検する。

寄生された場合・マダニはしっかりと吸着すると離れない。無理やり引くと、口器の一部が皮膚内に残存し予後が悪い。挿入したマダニの口器は、その形からちぎれ皮膚に残る。虫体に、「ベンジン」または「ワセリン」をつける。これによりマダニは呼吸できなくなり、自ら離れようとする。その跡にウイルス感染予防のため、消毒用エタノールをたっぷりつけておくとよい。

それでも除去できなければ、外科的な処置となる。また、寄生部位を中心に大きな紅斑ができた場合、日本紅斑熱などなんらかのウイルスやリケッチアが入った可能性があるので受診する。

東西南北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

「姨捨山」についての一考察

村越 稔

2012年8月、中国で開催の日中韓三国学生交流登山に参加した韓国の女子隊員(学生)が、12月に来日した。そこで法隆寺に案内し、ボランティア説明員の解説を聞き、如来と菩薩の違いなどを勉強した。その後、会話の中で、千

曲市にある姨捨山を訪ねたとき、地元の郷土史研究をしている方が、観光客に「姨捨山の伝説はなかった」というビラを配っていた、という話をした。すると女学生が、「それと同じような風習は高麗時代にあった。」と説明した。

そこで今回これをテーマに調べてみたところ、中国にも同様の風習があることが分かった。

岩壁の中腹に自死窟または老人洞という人間ひとりが入れるほど

の大きさの洞窟を掘り、労働能力

がなくなった老人を入れたと言われている。そういう洞窟が、昨年

日中韓学生登山会が開催された河北省で発見され、中国の人類学者

の研究報告がWEBにあることがわかった。昨年の中国側学生リ

ダにメールしたところ、同様なりポートが送られてきた。

『山の精神史——柳田国男の発

生』(赤坂憲雄・著/小学館)、岩手県遠野物語第111話に姥棄譚

がある。それによれば、山口・飯豊部落の少し離れた蓮台(デン

ラ)野という所に60歳以上の老人を追いやるが、日中は里に下りて

農作をして命をつないだ。この土地では朝、野良に出ることをハカ

ダチ、夕方、野良から帰ることをハカアガリと言うそうだ。

『老人と子供の民俗学』(宮田登・著/白水社)、『日本を語る12——子ども・老人と性』(宮田登・著/

吉川弘文館)によれば、インドの法典に由来する「棄老国——老人の知恵で棄老を止める話」が中国に伝わり、「雑宝蔵経」がある。

私は地方での講演会后、「老人

を棄てたという場所があるが本当だったのか」という質問をよく受ける。「全国昔話資料集成」(関敬

吾・著/岩崎美術社)によれば、ほぼ全国に伝説があり、赤城山や富士山などの山裾野周辺に姥棄伝説

が多い。

アラスカの氷上生活民族にもそ

の昔、老人は自分から口減らしのために外に出て行った、という話

がある。しかし実際には、姨捨の伝説の場所からは骨は出ないとい

う。

むしろ、遠野物語では飢饉のときに間引きがあり、土間から常居

への踏み台の下を掘ると小さい骨が出ない家はまずない、とある。

ヨーロッパにも、ヘンゼルとグレーテルの話がある。いずれも食

料が乏しい地方や、疫病などで家族を養えない時代には避けられない事情があったのだろう。

棄老伝説は、仏教の教えで孝行を説いたもので、実際にはなかったという人もいる。だが自分は、や

はり飢饉をきっかけに生後の間引きや、老人が家を出て行くことはあったものと考ええる。平和の恩恵にひたつて、飽食の今の日本人には想像困難だが、それをやらなければ全員が餓死している。稲作伝来の研究で青森の歴史博物館に行ったとき、飢饉の悲惨さがよくわかった。

『日本を語る12』によれば、埋め墓と詣り墓の両墓制のうち、遺体を棄てた埋め墓の場所が棄老としての言い伝え場所になっている、とある。それなのに骨が出ないのは、しばらく老人が山で自活して死ねば家族が骨にして墓に入れたのではないかと考える(中部以北では越冬が大変)。

現代は、高齢者向け施設が一種の姨捨山で、引き取りに現れない家族もあるという。また、認知症高齢者が街中で発見されても、家族から捜索願が出ない例もあるという。自分も昨年、97歳の父親を高齢者向け施設に入れた。90歳の母親が共倒れになるのを防ぐためであるが、後ろめたさは残り、それがこれを書く動機にもなっている。

『句集 高嶺星』発刊に寄せて

篠崎 仁

川越尚子さんが、『句集 高嶺星』を執筆・発刊された。山と自然への想い、そして家族への愛情を詠んだ句に心を打たれたので、ここに紹介したい。

私が川越尚子・孝次ご夫妻と初めて出会ったのは、1996年3月、東大秩父演習林での自然観察会であった。本当に仲の良い、そして山をこよなく愛するご夫妻で、日本の山や海外の多くの山をいつも一緒に登っていた。私はお二人を前にして、「川越夫妻は日本山岳会の鑑かたどです」と申し上げたことがある。

尚子さんは、ほどなく私も所属していた自然保護委員会に入会された。委員会にとって一つのエポックとなった大台ヶ原での自然保護全国集会では、実行委員長として会議を成功に導いた。さらに、あの難しい森林インストラクターの資格を取得し、自然観察会の運営にあたられた。

『句集 高嶺星』は、こうした「山」と「自然」を織り込んだ山の句集



2013年2月
花神社刊 228頁
四六判 定価 2730円

である。約3千句から480句余りを選定し、日本の旅、世界の山旅、日本の四季の3章で構成。表題は、「ちちろ鳴くシャモニー谷の高嶺星」からとった。ジャケットと挿絵は、アルパイン・スケッチクラブの会員であった孝次さんの作品を使用、その意味では、この句集はお二人の合作であるとも言い得よう。また、山の句集である一方、孝次さんやご家族への深い愛情を控えめに表現した句が時折顔を出し、ここにも心が惹かれる。この句集は「自然への想い」と、「夫君孝次さんへの愛情」が通奏低音として底に流れており、それが壮大な合奏協奏曲となって高みへと導いていく。書を手に取って、ぜひ鑑賞していただきたいと思う。

「凍て道に手を取り合ふて老夫婦」この一句をあげて結びとする。

活動報告

集會委員会

戸狩温泉スキー懇親会

1月20～22日、スキー集會に参加した。20日、戸狩野沢温泉駅に着くと、幹事の高橋聡さんがJACの旗を持って迎え出てくれた。宿のメイプルハイムは、名前と建物とはちぐはぐな感じだが、とにかくグレンデに近い。

身支度もそこそこにスキーを履き、まずは戸狩スキー場全山探索に出る。わかったことは、スキー斜面は「信越トレイル」上にある仏ヶ峰の東斜面にあつて、ペガサス・ラン、カシオペア・ラン、オリオン・ランの3ゾーンからなっている。オリオン・ランは緩い斜面で、初心者練習に使うようだ。

受付時間が迫ってきたので、急いで宿に戻る。夕食は、高橋幹事の挨拶で始まり、続いて自己紹介があり、座は一気に和む。食卓に

はそれぞれ持参の自慢の銘酒が並び、食後は果てしない懇親となる。21日、ガイド付きスノーシュー・ハイキングは8時30分出発。スキー組は9時出発で、両・高橋インストラクターの講習を受ける組と、勝手スキー組とに分かれる。だがこの日、オリオン・ランのリフトが止まっているため、両組とも使う斜面はカシオペア・ランに限定される。ときどき気分転換でペガサス・ランを往復する。午後はほぼ全員一緒に滑る。3時半ごろまでにそれぞれ宿に戻り、入浴。宿ではリンゴが食べ放題で、嬉しい。夕食後は幾つかのグループになり、山談議に花が咲く。

22日、雨。熱心な3人組がスキー場に出る、昼までにぬれ鼠で宿に戻ってきた。昼食は、宿の手打ちそばをいただく。つなぎに、おやまぼくちを使った珍しいそばで、富倉そばともいうらしい。雨は一

向に止まず、全員早めに帰ることになり、駅に向かう。

今回、参加者は例年より少なかったが、全員でまとまつてのスキーや山談義など、楽しい懇親会となった。

(石原達夫)

スノーシュー・ハイキング

2日目、私たち2名はスノーシュー・ハイキングに参加した。信越トレイル・トレッキングのときも立ち寄った「なべくら高原 森の家」を9時、ガイドさんと出発。

信越トレイル「牧峠」の登り口付近まで3時間のスノーシュー・ハイキング、昼食後「森の家」午後3時着であった。

途中、ヤッケを脱ぐほどの快晴



昼はスキーやスノーシュー、夜は山談義を楽しんだ

無風、絶好のハイキング日和。斑尾山、飯縄山、苗場山、鳥甲山などが白銀に輝いていた。鍋倉山の名前の由来となった地形や植物の解説、実物を観察しながらのカモシカ・キツネ・タヌキ・ウサギの足跡の見分け方など、現地ガイドならではの解説をしていただいた。真っ白いウサギが跳び出し、ぴよんぴよんと雪上を駆ける姿はとても愛くるしかった。(吉田理二)

総務委員会

平成24年度第2回支部事務局担当者会議を開催

1月26日、27日の2日間にわたり、当会およびプラザエフの会議室において支部事務局担当者会議が開催された。山形支部を除く30支部より事務局担当者が出席し、活発な議論を展開した。尾上会長から、「財政健全化には会員増が望まれる。そのためには、会員であることのメリットが求められている。各支部の中に受け皿としての止まり木の必要性を痛感している。また、種々団体からの、支部活性化のための補助金利用も有効と考える」とあいさつがあった。



平成24年度支部事務局担当者会議に参加の皆さん

会務報告は、会全体と委員会の問題点と改善策、今年度財務および寄付状況、また現在進行している日中韓三国学生交流登山の国内開催予定、環境省東北海岸トレイル計画などについてそれぞれの担当者よりあった。

引き続き、今回の主なテーマである会計処理について解説、そして質疑応答がなされた。これは、今期決算より新しい公益法人会計基準によって行なうための準備として、昨年より繰り返し行なっているもので、今回は寄付金処理を取り込んで行なわれた。まず「平成25年会計処理の手引き」が吉川公益法人運営委員より、また、平成

23年度決算からの反省点・留意点について、併せて平成25年度予算編成状況の報告が大模造紙を示しながら小林財務担当理事よりあった。関連事項として、佐野公益法人運営委員長より、「公益目的事業とは何か」と「寄付を受けた場合の非課税措置と各種助成金について」のテーマの話が続いた。各支部からは、平成25年度事業計画の発表があった。

もう一つの主な議題である、新版「日本三百名山登山ガイド」出版について、尾上会長より今までの経緯の報告があり、企画者の収益事業・会員サービス検討プロジェクト・チームリーダーの節田理事が計画案を発表し、支部の協力を呼びかけた。担当する山などについて、各支部の熱心な討議があった。

今回ゲストの神崎忠男日本山岳協会会長による特別講演「日本の登山界について」があり、登山界の歴史とともに、将来像をビデオに話された。

盛りだくさんな内容であったが、懇親会も含め大いに支部活性化について意見を交わすことができた2日間だった。

(高原三平)

支部

だより



全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

東九州支部

2月は霧島山と椿山公園へ

2月の月例山行は霧島山だ。今年
の月例山行テーマは「近県の最
高峰に登ろう」で、2月は鹿児島
県・宮之浦岳になるが、昨年の月
例で行ったばかり。そこで、九州
本島の鹿児島島の最高峰・韓国岳と
なった。さらに今回の月例には、も
う一つの隠れたテーマがあった。

2月9日早朝、参加者7名が2
台の車に分乗し一路日向路を南下。
昼前にえびの高原に着き、午後、韓
国岳へ登る。新燃岳の活動がなけ
れば縦走するところだが、今回は
それを断念。穏やかで素晴らしい
快晴の下、山頂で遠く桜島や九州
脊梁の山々を眺めて景色を堪能。
その後、大浪池を回って下山。夜
は、白鳥温泉の下の湯キャンプ場
で野営。

10日、高千穂河原から高千穂峰

へ登る。快晴の素晴らしい天気で、
何度も爆煙を吹き上げる桜島の様
子を遠望しながら登る。夜は、宮
崎市郊外の椿山へ移動して野営。

実は、もう一つの隠れたテーマ
はここにあった。椿山森林公園は、
ヤブツバキがたくさん自生し「椿
山」と呼ばれていた地域を宮崎市
が公園に整備したもの。広大な山
地に、国内はもちろんのこと、世
界各地域から集められたツバキが
約1000種類、約5万本植栽さ
れているという。この椿山公園と
我々の山行になんのかなりがあ
るのか？

それは、この椿山森林公園の一
角にある「野口秋人記念園」にある。
野口秋人氏といえば別府市野口病
院の院長で、甲状腺疾患の治療に
おいては全国に知られた名医であ
った（日本医師会最高優功賞や勲
5等褒光旭日賞などを受賞）ばか
りでなく、登山愛好家として登山



椿山森林公園、野口秋人記念園レリーフ前で

界でも名を馳せ、東九州支部の第
二代支部長（1964〜89）でもあ
った人だ。

氏が支部長時代の1985年、
今西壽雄会長や西堀栄三郎博士を
招いて、宮崎県高千穂町の五ヶ所
高原で行なった「第1回ウエスト
ン祭」は、その後も毎年実施され
た。そして、独立した宮崎支部に
引き継がれ、今日に至っている。

さらに氏には、もう一つの隠れ
た趣味があった。それはツバキの
コレクションである。国内はもと
より、世界あちこちの旅先で買い
求めたものや、世界各地から取り
寄せたツバキがたくさんあった。
1989年10月、突然病に倒れ死

去されたが、氏が集めたそのツバ
キが翌年、息子さんにより宮崎市
に寄付され、記念園として椿山森
林公園に残されているのだ。

今回、月例山行で霧島山を訪れ
るにあたり、せっかく宮崎まで足
を延ばしたのだからちよつと寄り
道をして、先輩の記念の公園を観
賞しようということになった。一
行は11日、この森林公園を散策し、
野口秋人記念園を訪ねた。春まだ
浅き園内であったが、寒咲き・早
咲きの花がちらほら見られた。

（飯田勝之）



図書紹介

京都外国語大学付属図書館、
京都外国語短期大学付属図書館・
編集発行

『知られざる世界への挑戦——
航海探検、漂流を記した書物百選』



2012年10月
雄松堂書店発売
A4判 231頁
定価 2000円

2012年10月11日から16日の間、東京の丸善・日本橋店で、京都外国語大学創立65周年記念稀観書展示会「知られざる世界への挑戦」が開催された。その会場では65冊の稀観書が展示された。これらの展示書は標記の『書物百選』に基づいて厳選されたものである。

見事な版画やスケッチ、当時の人々には物珍しかったであろう多くの地図の入ったまさに浩瀚な書物を目の前にして、書物の中に浮

き上がってくる航海者や探検家、漂流者たちの息遣いが聞こえるような思いに駆られた。『漂流』以外の展示本は、すべて外国語で書かれている。

邦訳書で読んだものもあるが、祖本の古びてはいるが、それ故に生々しい装丁、過ぎた歳月にセピア色に変色した各ページから、邦訳書にはない当時の凄まじかった航海や探検、漂流の有様が沸々と沸き立っている。

展示本の基になっているこの図録『書物百選』では「航海」の部には50冊、「探検」の部には当会の図書館にもあるウインバー『アンデス登攀記』全2巻、ウェストン『極東の散歩道』、スタイン『古代中央アジア踏査記』も含め42冊、「漂流」の部には日本人の記録が8冊入っている。

できごとを年代別に見ると、13〜16世紀の間は1270年のマル

コ・ポーロの『東方見聞録』から、1585年の『天正遣欧使節記』までの14冊。17〜18世紀の間は1600年の『ウィリヤム・アダムス(三浦按針)からの二つの手紙』から、1798年のナポレオン『エジプト誌』全20巻までの35冊。19世紀は1803年のクルゼンシュテルン『世界周航記』から、1899年ハリマン『アラスカ』までの44冊。20世紀はスタイン、アムンゼン、スコットなどの本7冊。合計100冊である。

それぞれ見開き2ページに著者の略歴、本の内容が簡潔に述べられている。また、この2ページには実物本の見開きページや数葉の図版なども載せられている。

この『書物百選』に目を通すのは、概略とはいえ大変なことである。だが、ページを繰っていると益々魅了され、何日かをかけて読了することになる。座右に置いてじっくりと見惚れ、読みたい図録である。

(田村俊介)

伊佐九三四郎・著
『大河紀行 荒川——秩父山地から東京湾まで』



2012年11月
白山書房刊
A5判 218頁
定価 2100円

著者が、タイトルまで決めてきた本書は、荒川の上流、真ノ沢を遡行して甲武信ヶ岳直下の源流点まで行き、最初の一滴をすくうことから始まる。そして入川、三峰口、秩父盆地、長瀬、寄居、鴻巣、戸田、千住、葛西と東京湾まで完歩、それぞれの地域の歴史や話題を取り上げ解説されている。また本文と平行して、5万分の1の地図が随時掲載され、歩いた道が点線で書かれていてわかりやすくなっている。

本文最初の「真ノ沢を遡る」の中に「これから下流域の踏査が始まる。源流域の自然、三峰、猪狩山、秩父御嶽山などの山岳信仰、秩父盆地の暮らし、荒川の流路の付け替えや荒川放水路の開削と洪水、隅田川と江戸文化などのテーマが次々に浮かんで消える。」とある。最初の真ノ沢遡行直後に、頭の中

にこれだけ浮かんでくるほど著者は、この流域を何度も歩いているのに驚かされる。正しく「脚で書く仕事」である。

上流にあたる秩父盆地一帯の話には歴史的なことが多く、少しピクアップしてみる。

普寛行者——秩父大滝村生まれ。木曾御嶽山に、一部修験者だけでなく、軽精進で男女の別なく登拝できる道(王滝口)を開く。

秩父事件——高利貸からの借金に苦しむ養蚕農家を救おうと、秩父地方の自由党员と農家が蜂起するが、暴動として制圧された事件。明治百年を機に正当な政治活動として見直された。

秩父の夜祭と川瀬祭——夜祭は日本三大曳山祭の一つで有名であるが、夏の川瀬祭は御輿を荒川に担ぎ入れる豪快なもの……等々。

また、ときどき挟まれるそれぞれの土地の人との何年にもわたる交流や、そのときの会話、取材話は、非常に楽しく読ませてくれる。

荒川の全長173^キ(理科年表)プラス9^キ、回り道や登り直しを考えると、200^キを優に超すものと思われる。後期高齢者の著者には、決して簡単なことではない

と思う。無事終了、おめでとうございます。

荒川といえば秩父の夜祭、長湍ライン下りが頭に浮かぶ。その程度の知識しかなかった私が、うんちくぐの塊のような本書を紹介するのは大変勉強になった。

(茂見 猛)

水越 武・著

『月に吠えるオオカミ——写真をめぐるエッセー』



2013年2月
岩波書店刊 134^頁
四六判 定価 1995円

穂高やヒマラヤといった内外の高峰、日本の原生林、また生命の宝庫である熱帯雨林をはじめ、生物多様性に富む自然と長年にわたって対峙してきた水越武。本書は、日本を代表する写真家であると同時に、優れた登山家である水越が、約50年にわたる活動のなかで、心に残る人々との出会いや、過酷な撮影状況のなかにありながらも、真摯な態度で自然に寄り添い続けた彼自身の記憶を綴ったエッセー集である。

水越武は、1938(昭和13)年、愛知県豊橋市に生まれた。幼いころから山の自然に親しみ、20代のころにナチュラリスト・田淵行男の『高山蝶』に感銘を受け、写真の道に進むことを決意した。「回想・田淵行男 先生から学んだこと」では、「修行僧の面影を彷彿とさせるような凛とした師から、山に対するひたむきな姿勢や、自然をリアルに直視する洞察力を学んだことが、深い尊敬をこめて語られている。そして、四季を通じて足しげく通いながらも、特に厳冬期という自然条件の厳しい穂高に魅了されたデビュー作の「穂高」。1971年に発表したこれらの作品群は、厳然たる山の真髄を示し、山岳写真界にその名を深く刻むこととなった。

水越の視点は国内外の高峰から自然界の動植物へと移り、原生林や熱帯雨林、また急激な速度で温暖化が進む世界各地の水河など、地球全体を取り巻く生態系がテーマとなっている。「自然の多様性こそが、地球を美しく彩り、豊かな表情を与え、美しく調和させる」という言葉は、地球に生きる我々に対して、常に地球を視野に入れ

て生きていかなくてはならないという、彼の一貫して変わることのないメッセージにほかならない。

「地球はなんと美しく、無限の表情を持ち、多様性に富んだ不思議な生きものを抱え込んでいることか。人間にとって母なる星である地球は、ひとつの生命を持つ有機体であると捉えたジェームズ・ラブロックの『ガイア』の考えも知っている。大気、海洋、大地、それぞれが深く関連して息づいていると私は実感した。」(地平線への夢——あとがきにかえて)

水越の豊饒な写真世界の軌跡を語る本書は、23点の作品とともに、地球規模で進む自然破壊への警告のみならず、生命の多様性と美しさを静かに語りかけているのである。

(関次和子)



ドイツ・オーストリア・
南チロル山岳会・共著

『BERG 2013』



2012年10月
Vertrieb Buchhandel
Deutschland刊
ワイド判 256頁
€ 17,80 ISBN:978-3-937530-60-4

ドイツ・オーストリア・南チロル山岳会の合同年会報。例年の付録地図とその山域特集はザルツブルク州のテンネン山地。昨年から編集が大きく様変わりして、「フオーカス」「登攀」「人」「知識」「文化」の各章に、5〜8点のルポやエッセーを配した誌面構成になっている。ここでは巻頭の「フオーカス」を、日本山岳会のこれからの在り方も考えて紹介する。

焦点となるテーマはクライミングだが、その対象には自然の岩壁はもとより、人工登攀壁やフィード・アスレチックの類、はてはビルの壁面や廃工場の鉄骨や廃坑まで含まれる。山岳スポーツの世界に山と町の境がなくなり、ドイツ語圏の山岳会ではその是非を論じる時期もとくに過ぎていよう。とはいえこの章のタイトル

「すばらしい新山岳世界」が、オランダス・ハックスリのSF『すばらしい新世界』をもじったものであることは、アーバン・アルピニズムに対する疑念の暗喩なのか。記事は次の5点。

- ①「山と都会の文化の揺れ動く相互作用」を論じたエッセー。
- ②両下腿部が義足のアメリカ人クライマー（登るのは自然の岩壁）の度肝を抜かれるルポ。
- ③チロルの一画（エッツタールの入り口）に造成された「究極のアウトドア・プレイグラウンド」の探訪記。キーワードは「アルス・オップ（かのように）」の冒険。
- ④産業構造の変化で衰退したルール鉱工業地帯が、いまクライミングのメッカになっている。
- ⑤独立市カウフボイレで競合する2つのドイツ山岳会セクション（支部ではない。355にのぼるセクションはそれぞれ独立した経営体）が共同してバイオガス工場の跡地にクライミング・センターを建設し、この地方の「登山人口」を飛躍的に増大させた。このセクションにはカヤック、マウンテンバイク、ケイビ

ングなどの部会もある。

ドイツ山岳会は「登山」の概念を大幅に拡げることによって、いまや会員数が100万を目前にする急成長を遂げた。とりわけクライミング施設の建設と経営の果たした役割はきわめて大きい。

ほかには「登攀」の章のソビエト・アルピニズムの文化と歴史、「人」の章の傘寿を迎えたクルト・ディームベルガーのポートレート、「文化」の章のオーストリア山岳会博物館（インスブルック）所蔵の山岳立体模型などが私には興味深かった。いわゆる「遠征」の記録は、もはやドイツ山岳会の年会報にない。

（平井吉夫）

図書紹介の寄稿について

図書紹介のコーナーは、会員の皆さんから投稿していただく形式を採っていません。月例の図書委員会の席で、図書室に届いた本の中から紹介本と執筆者を厳選して執筆依頼をしています。

紹介したい本がある方は、必ず原稿執筆前に図書委員会にご連絡ください。

（図書委員会）

図書受入報告(2013年3月)

編著者	書名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
川越尚子	句集 高嶺星	228p/20cm	花神社	2013	著者寄贈
水越武	月に吠えるオオカミ：写真をめぐるエッセー	134p/20cm	岩波書店	2013	出版社寄贈
李希聖	台湾登山史：一個奮鬥上進的過程	281p/20cm	李希聖（私家版）	2005	中村保氏寄贈
柿沼恭介・松浦圭（共編）	虹芝寮：虹芝寮80年の歩み	326p/23cm	成蹊踏高会	2013	発行者寄贈
京都外語大付属図書館（編）	知られざる世界への挑戦：航海、探検、漂流を記した書物百選	231p/30cm	京都外語大付属図書館	2012	松宏堂書店寄贈
野口冬人	冬人庵書房：山岳書蒐集家の60年	268p/20cm	山と溪谷社	2013	出版社寄贈
権藤司（編）	山から始まる自然保護：山の自然学クラブ会報(第12号) No.12	168p/30cm	山の自然学クラブ	2013	発行者寄贈
加藤保男展実行委員会（編）	登山家 加藤保男と大東一高展：大東文化歴史資料館特別展 展示目録	32p/30cm	大東文化大第一高等学校	2012	発行者寄贈
西堀栄三郎記念探検の殿堂（編）	地球を愛した創意の旅人：西堀栄三郎の軌跡	44p/30cm	西堀栄三郎記念 探検の殿堂	1994	糸永正之氏寄贈
玉川大学教育博物館（編）	石に描かれた鳥たち ジョン・グールドの鳥類図譜	224p/30cm	玉川大学教育博物館	2012	松田雄一氏寄贈
深野稔生	銀嶺に向かって歌え：クライマー小川登喜男伝	312p/20cm	みずす書房	2013	著者寄贈
奥宮清人・稲村哲也（共編）	続・生老病死のエコロジー：ヒマラヤとアンデスに生きる身体・こころ・時間	322p/20cm	昭和堂	2013	出版社寄贈



平成24年度第11回(3月度)理事会 議事録

日時 平成25年3月13日(水) 19時

～ 21時

場所 日本山岳会集会室

【出席者】尾上会長、吉永・西村副

会長、高原・森・小林各常

務理事、野澤・中山・永田・

節田・川瀬各理事、平井・

浜崎各監事

【欠席者】萩原・古野各理事

【審議事項】

1・平成25年度事業計画書・収支
予算書(案)について(高原・小林)

別添資料により担当常務理事が

説明し、詳細に検討された。(承認)

2・YOUTH CLUBの組織

見直しについて(森)

YOUTH CLUBおよびそ

の下部組織である青年部委員会、

学生部指導委員会、指導委員会を

以下のように変更する。

YOUTH CLUBの下部組

織を青年部、学生部、ワンダーフ

ォーゲル部(新設)とし、指導委員

会を遭難対策委員会と名称を改め、

YOUTH CLUBから独立し

た委員会とする。担当は川瀬理事

とする。(承認)

3・マッキンリー気象観測につい

て(森)

電源開発(Jパワー)からの寄付

(今年度125万円)を、いまま

の当会との関係を考慮して受け入

れたい。ただし、JACC側の受け

入れ体制が整うまでは、「預かり

金」として計上する。なるべく早く

体制を整えるように努めたい。

4・59名の入会希望申込みがあっ

た。(承認)

【報告事項】

1・助成金受け入れ報告について

(小林)

2月14日以降、高尾の森づくり
の会で3件224万2千円の寄付
があった。

2・群馬支部設立について(高原)

群馬県在住者に支部活性化PT

の呼びかけにより4月14日、設立

準備会を行なう。

3・日山協からの4月入会打診に

ついて(尾上)

前向きの意見が多数あったが、

過去の経緯もあるので、会員の意

見を聞くことも必要で、いまし

時間が必要と回答した。

4・平成25年度(第15回)秩父宮記

念山岳賞推薦募集について(西村)

昨年度より早く、4月からホー

ムページで告知を行なう。また審

査委員の強化を予定している。

5・「山の日」制定について(西村)

3月27日に「山の日」制定協議

会を開き、今後の具体的なステッ

プを検討する。

6・同好会が行なった海外公募ツ

アー(ホームページ)について(高

原)

旅行業協会より旅行業法違反と

いう指摘があった。再発防止のた

め、関係者に向けたマニュアルを

作り周知を図る。また、デジタル

メディア委員会でホームページ掲

載の際、チェック機能を設ける。

7・2013年度新永年会員候補

者は47名が対象になる。(高原)

8・会費未納による除籍(平成25

年3月31日予定)対象者は60名

(高原)

9・JANのvol.14 2013のコン

テンツは別紙のとおりである。4

月に発刊の予定。(高原)

10・新会員管理システムの対応に

ついて(高原)

本システムを稼働に向けて継続

することとした。高原常務理事を

責任者とし、システム管理者、そ

して事務局責任者を決めた。

ルーム日誌 3月

11・世界文化社より発刊予定の書籍『山の詩手帳(または山の歳時記)』への協力依頼があり、了承した。担当には田邊会員があたる。

(高原)

12・科学委員会よりロゴマーク使用願があり、承認した(高原)

13・都岳連よりメールマガジンの配信を開始したという通知があった。また2013年度TMFカードを発行し参加者を募集しているという通知があった。(高原)

14・埼玉岳連より、同県天覧山の岩場の利用方法が定まり履行の依頼があった。(高原)

15・会報『山』3月号について(節田)

海外登山助成基金のレポート(最終回)をトップ記事で掲載。

【今後の予定】

1・内閣府へ平成25年度事業計画書・収支予算書提出 3月29日(金)

2・岐阜支部定時総会および懇親山行 4月13日(土)~14日(日)

3・都岳連よりの「山の天気入門講座」(4月~12月)ほか講習会の案内

4日	総務委員会 高尾の森づくりの会 公益法人運営委員会
5日	図書委員会 スケッチクラブ
6日	YOUTH CLUB 集会
7日	常務理事会 YOUTH CLUB
11日	スキークラブ スケッチクラブ
12日	山岳研究所運営委員会 九五会
13日	理事会 休三会 山想倶楽部
14日	フォトビデオクラブ 山岳地理クラブ 海外委員会
15日	二火会 支部活性化PT集会委員会
16日	燦々会 山の自然学研究会
18日	総務委員会 資料映像委員会
19日	00回 スキークラブ
21日	科学委員会 青年部 みちのり山の会
22日	緑爽会 公益法人運営委員会
25日	フォトビデオクラブ YOUNG

26日	UTH CLUB 総務委員会 デジタルメディア委員会 図書管理委員会 麗山会
27日	自然保護委員会 三水会 つくも会
28日	学生部
29日	YOUTH CLUB
30日	土曜会 3月来室者 451名
会員異動(3月分) 物故 松山タエ子(10732)13・3・24 渡辺 陸(10995)13・2・6 退会 石川三知子(6054)越後 山里寿男(6286) 山本直也(7104)北海道 東 司(7826)岐阜 中園喜一郎(7985) 和田賢次(8186)四国 丸山昭一(8309) 奥倉 啓(8552) 鷺尾 顕(8918)関西 沖 晴治(9589) 大谷雄次郎(9820)信濃 堀 秀臣(9855) 入江善一(10012)京都・滋賀 正橋剛二(10932)富山	

小野忠道(11946)	横山清哉(12805)越後	山下 博(12869)	小野久光(12889)東海	藤川弘子(13051)宮崎	吉田 薫(13112)東京多摩	村瀬忠男(13153)東京多摩	桃谷尚安(13368)	江寄一男(13420)関西	三宅光子(13447)	浅井 宏(13613)宮崎	莊司昭夫(13641)秋田	猪八重超(13782)宮崎	清水正弘(13825)広島	弓削三重子(13878)宮崎	三木靖子(14051)北九州	石田 昭(14152)北海道	兵部智代(14295)関西	小林富雄(14317)北九州	竹下正彦(14344)広島	林 久人(14654)	鈴木謙治(14688)東京多摩	石間宏美(14850)静岡	大橋幸子(14991)
-------------	---------------	-------------	---------------	---------------	-----------------	-----------------	-------------	---------------	-------------	---------------	---------------	---------------	---------------	----------------	----------------	----------------	---------------	----------------	---------------	-------------	-----------------	---------------	-------------





インフォメーション

◆第29回全国支部懇談会と記念山行のご案内

静岡支部

静岡には百名山が9座、100以上のピークも400山以上あります。また、風光明媚な名所・旧跡が各地に散在し、古代から江戸までの歴史を残しています。支部懇談会では、講演会や3コースに分かれた登山やハイキングを企画しています。ぜひご参加ください。詳細については、支部のHPをご参照ください。

日時 10月20日(日)～21日(月)

会場 ホテル アソシア静岡

日程 ■20日：講演会、懇親会

■21日：記念山行(①登山)

富士宮口新5合目～御殿場口新5合目②樹林帯を歩く③ミカン畑を歩く

費用 2万円

定員 250名

締切 6月30日(日)厳守

申込 支部一括の場合は、各支部

担当者に申し込む。

個人の場合は、ハガキ、FAX、メールで申し込む。

*申し込みには、支部名、希望する山行コース、交通手段を明示。

*申込用紙は、支部HPよりダウンロードできます。

申込み・問合せ 静岡支部事務局

有元利通(420-0871 静岡市葵区昭府2丁目26-9)

TEL & FAX 054(251)4198

✉ fujia-ari@nifty.com

*申込み者に詳細案内を送ります。

◆新入会員のための企画「徳本峠越えとウェストン祭」山研委員会

ウェストンの足跡を辿り、新緑の島々谷から残雪の徳本峠を越えて上高地へ。山研に1泊し、翌日「碑前祭」に参加します。新会員の仲間づくりを手助けする企画です。

現地集合・解散。

日程 6月1日(土)～2日(日)

費用 1万2千円(宿泊、午餐会、記念品、保険代含む)

定員 20名(24年度入会会の会員、および本会会員の希望者)

申込 5月18日(土)までに、柴山信夫

TEL 090(8331)4212

✉ sibasan@sannet.ne.jp

*申込み者に詳細案内を送ります。

◆奥秩父の岩峰を歩く

集委員会

シヤクナゲの最盛期に奥秩父の秘峰・五郎山、展望のよい男山から天狗山、小粒でピリリの林岳へ。温泉泊(せせらぎの里)し、軽荷で登ります。現地集合・解散。

日程 6月8日(土)～10日(月)

集合 8日10時40分 JR小海線 信濃川上駅

費用 1万6千円(宿泊、保険代他)

定員 15名

申込 5月20日(月)迄に、植木淑美

(FAX) 042(734)1498

✉ yoshini-denali@jcom.home.ne.jp

*申込み者に詳細案内を送ります。

◆探索山行のご案内

科学委員会

霧ヶ峰に、黒曜石の産地と歴史

日本山岳会団体傷害保険 加入のすすめ

加入対象者(被保険者): 日本山岳会会員の皆様
会員の方がご加入の場合、配偶者、お子様、ご両親、ご兄弟、会員ご本人の同居の親族及び同居の使用人の方も同時にご加入いただけます。

中途加入可能です。まずは、資料請求下さい!

海外登山の保険、その他損害保険・生命保険全般ご相談も承ります。

東京海上日動火災グループ代理店 株式会社東海日動パートナーズ東京
団体傷害保険資料請求担当: 藤田 Mail: a.fujita@tnp-higashitokyo.co.jp
TEL.0120-161-808 FAX.0120-161-809

第15回「秩父宮記念山岳賞」の推薦募集について

秩父宮記念山岳賞審査委員会

第15回「秩父宮記念山岳賞」の推薦(他薦のみ)を次のとおり受け付けますので、事務局まで資料をご請求ください。当会のHPを活用される方は、推薦募集の詳細を掲載してありますので、推薦要項・所定様式(ダウンロード可能)などご参照ください。

多数の推薦をお待ちしております。

なお、本賞は公益目的事業であることに鑑み、前回より受賞者を本会の会員またはグループに限定しないことになっています。

- 対象分野 ・登山活動 ・山岳に関する文化的活動、学術的業績
- 提出先 日本山岳会内 秩父宮記念山岳賞事務局
- 締め切り 平成25年8月31日

を訪ねます。往復チャーターバス利用。ヒュッテ・ジャヴェルに宿泊、オーナーの講話もあります。

日時 6月22日(土)～23日(日)
日程 22日・7時30分新宿西口工学院大学前集合。8時出発。黒耀石研究センター、体験ミュージアム、発掘現場、史跡和田峠を見学

■23日・物見岩、八島ヶ原湿原、鷲ヶ峰を散策。帰路、

片倉館(千人風呂) 入浴・19時新宿着

費用 1万8千円(バス、宿泊他)
申込 山田誠(探索山行担当)
(〒152-0023目黒区八雲2-25-17)

TEL 03(3723)2171
FAX 03(3723)2171
yakumoyamada@t00.itscm.net

◆2013自然保護全国集会

「立山・弥陀ヶ原の自然に学ぶ」

自然保護委員会・富山支部共催

日時 7月6日(土)～7日(日)

場所 富山県富山市

宿泊 「立山国際ホテル」(前夜泊可能、事前連絡要)

日程 ■6日集会(支部報告、基調講演、グループ討議、懇親会)

■7日フィールド・スタディ①弥陀ヶ原②室堂平③立山博物館と立山カルデラ砂防博物館

費用 1万4千円(①②のコースはバス代など別途必要)

申込 5月31日迄に、希望コースを明記して、川口章子(〒274-0063船橋市習志野台4-43-11102)

TEL 047(463)8721

FAX 047(463)8721

syuaki@pony.ocn.ne.jp

syuaki@pony.ocn.ne.jp

syuaki@pony.ocn.ne.jp

syuaki@pony.ocn.ne.jp

syuaki@pony.ocn.ne.jp

syuaki@pony.ocn.ne.jp

syuaki@pony.ocn.ne.jp

syuaki@pony.ocn.ne.jp

『木の目草の芽』3月号を発行 自然保護委員会

自然保護委員会機関紙『木の目草の芽』3月号(最新号)を発行しました。今号は、「辻井達一氏の訃報に接して」(新妻徹氏)、「南アルプス水車小屋便り」(市川義輝氏)、「福島のこと②子供たちくすくすかしどり」(高田雅雄氏)ほかを掲載しています。

機関紙は年6回隔月発行、購読料は年間千円(送料込み)です。購読希望の方は左記までご連絡ください。

・申し込み・川口章子

TEL 047(463)8721

FAX 047(463)8721

syuaki@pony.ocn.ne.jp

振込先(郵便振替): 001180

4710688(加入者)

川口章子

問合 近藤雅幸 TEL 080(6629)4630

*申込み者に詳細案内を送ります。

◆小泉武栄氏巡検参加者募集

山の自然学研究会

小泉氏と、伊豆東海岸と天城山を観察して歩きませんか。往復チャーターバス利用。

日時 6月1日(土)～2日(日)

定員 25名

費用 約2万円(バス代含む)

◆後藤三男油絵展

信州安曇野と北アルプスの風光を描いた風景画と、海外の山岳画を合わせた油絵30余点を展示。

会期 5月13日(月)～19日(日)(10時～19時)

場所 ギャラリー八重洲 東京(東京八重洲地下街3番通り)

TEL 03(3287)0623

FAX 03(3287)0623

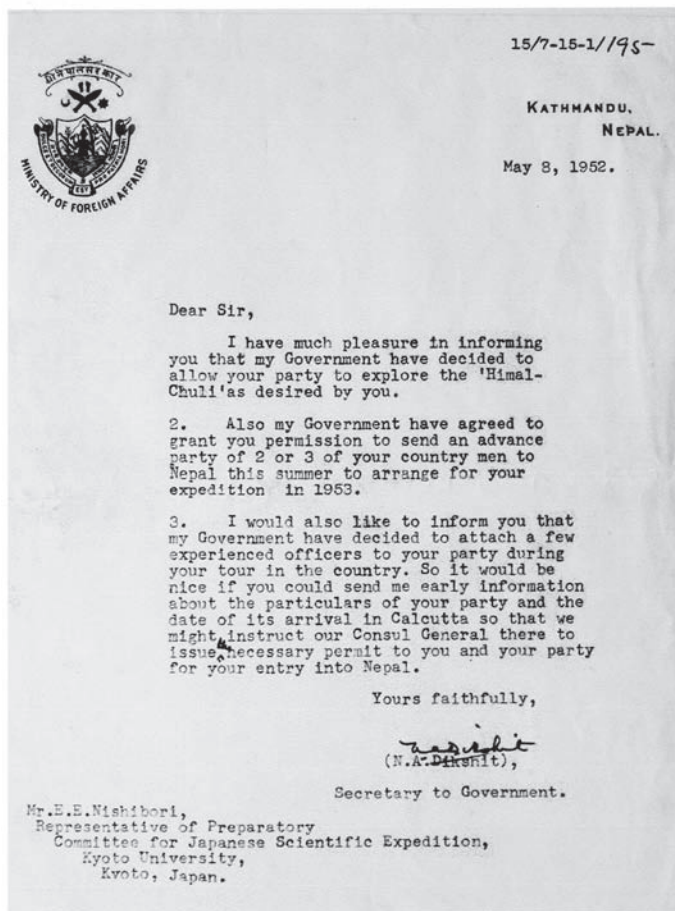
syuaki@pony.ocn.ne.jp

syuaki@pony.ocn.ne.jp

syuaki@pony.ocn.ne.jp

日本山岳会蔵資料紹介 No.1

[資産番号] 00046
 [資料名] ネパール政府からのマナスル登山許可証
 [部門名] 書簡(ほかにマナスル関係11通)
 [寄贈者] マナスル登山隊
 [受入日] 不明



1952年5月8日付け、外務省公文15／7-15-1／195、京都大学日本学術探検隊準備委員会代表西堀栄三郎宛。踏査登山隊および第1次マナスル登山隊へのネパール政府からの許可証。ほかに2次隊、3次隊への許可証など11通の関係書簡がある。

1956年5月、日本山岳会はマナスル(8163m)に世界で初めて挑戦し、登頂に成功。だが、計画から登山許可証取得まで、非常に困難を極めた。第2次世界大戦後の1952年、サンフランシスコ講和条約が発効されるまで、日本は独立国として認められていないうえ、ネパールとの国交もなく入国は困難な時代であった。そんな時代背景のなか、登山許可証を獲得するため、西堀栄三郎氏が許可交渉に粘り強く取り組み、そして関わった多くの人々の力が集結され、登頂成功へと導かれた。

この登山許可証は、日本山岳会の歴史において最も古いものである。

なお、日本山岳会ホームページ→委員会活動→資料映像委員会→所蔵資料紹介へとアクセスすると、「会報ページそのもの」+「解像度の高い英文許可書のみ」を拡大して見ることが出来ます。活用ください。

また、公開資料に関する情報・ご意見・ご教示など、下記までお寄せください。

☞jacshiry0102@jac.or.jp

(資料映像委員会)

日本山岳会会報 山 815号

2013年(平成25年)4月20日発行
 発行所 公益社団法人日本山岳会
 〒102-0081
 東京都千代田区四番町5-4
 サンビューハイッツ四番町
 TEL 東京(03)3261-4433
 FAX 東京(03)3261-4441
 発行者 日本山岳会会長 尾上 昇
 編集人 柏 澄子
 Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
 印刷 株式会社 双陽社

◆編集後記◆
 ●3・11以降たゆまず続けてきた
 芳山の登山道の放射線測定について、報告いただいた。実に地道な作業であり、終わりの見えない真つ暗なトンネルのなかを歩まなければならない問題でもある。日本山岳会の会員の皆さんからも、被災地の現状や地震や放射能汚染の被害を受けている山岳地域についてレポートいただきたい。
 ●P19の資料紹介は、資料委員会メンバーであり会報編集担当の奈良千佐子さんが中心となった新連載。会には資料や絵画が多数ある。一部はルームに展示してあり、訪れた会員が目にもすることもあるが、東京近郊の会員に限られる。貴重な資料を紙面で紹介すれば、各地の会員の方々に見ていただけるだろうという試みです。(柏 澄子)